

花登筐

商人編

大和歌
中
見

花登筐



商人編

文藝春秋

花登壇（はなと こぼこ）

昭和3年、滋賀県に生まる。26年、同志社大学卒業後、作家活動に入る。テレビ作品「番頭はんと丁稚どん」「やりくりアパート」で喜劇作家として頭角を現わし、以後演劇、テレビ作品、小説などに幅広く活躍。43年、東海テレビ「飛騨古系」で明治百年記念芸術祭芸術祭賞を受賞。現在「劇団喜劇」主幹。

主な作品

「細うで繁盛記」講談社
「どてらい男」徳間書店
「あかんたれ」文藝春秋
「花ぼうろ」番町書房
「花登壇長篇選集」十巻・講談社

さわやかな男^{ヤツ}（商人編）

昭和五十三年三月一日 第一刷

定価七八〇円

著者 花 登 壇

発行者 檉 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

さわやかな男ヤツ
(商人編あきんど)

装
幀
栗
屋
充

七色の水

歲月は五年経過した。

勝は西陣商業の五年生になっていた。

五年経っても、勝の水の流れを見る眼は変わりなかった。

その勝の眼に映る流れは今もなお氷川先生の面影が浮かんでいるのである。

だが、五年前と違うところは、その川が、琵琶湖畔のあの澄んだ水を流していたのに反して、何とも言えぬ色の水であったことである。

それもその筈、その水は、少くとも七色の染料に染まった水なのである。

京都堀川――。

江戸時代前期、宮崎友禪斎なる絵師の手で考案されたという染めの技法によって、御所の宮人達や、都人の纏う衣が産まれ、やがて、この堀川の東側が、友禪染なる染物の業を為す人達の町となってしまった。

染物はまず水である。京都の水は、その染物に適する硬

水であるところから、この堀川の川畔に染物屋が出来たのである。

染物屋は、その堀川の水を使って、染の最後の工程である水洗いをする。そして川の水が染料で染まって絵具を溶かしたような水となる。

あの故郷の澄んだあの水の川辺に、氷川先生の想い出がある勝ではある筈なのに、その染料で濁った水を見ていながらも、氷川先生への追憶の邪魔にはならなかったのは、(清水だけが、水ではない)

いつしか、それがわかる程、世間というものを見て来たからであろう。

いや、勝は、見違える程、たくましく成長していた。

頭こそ坊主頭で変わらぬが、琵琶湖の小魚のせいで太い骨格に肉がつき、がっしりした体、それに、両親の長所ばかりを受け継いだ顔の眼は、大きく鋭く、立派な鼻の下に、への字に閉じられた唇は、見るからに精悍さに溢れ、既に充分に大人の仲間に入っていた。

事実、勝は、本来ならもう中学を卒業している筈であった。

故郷を出たのが中学一年生、それが五年後の現在、まだ五年生に居るのは、一年間学校へ行かなかったからである。あの直後、勝の一家は、近江八幡を出ると京都へ移った。京都の西陣と呼ばれる、堀川より西、下立売通りを少し下がった路地に家を借りると、勝は平太郎と共に働くこと

にしたのである。

「勝、お前の学資位は何とか出来るさけ、学校だけは行つてくれ」

そう願う父母に、勝の決意は堅かった。

「いや、お父さんも一からやるんや。そやさけわしも一からやる」

勝をして、佐藤田と戦う為には、まず財を為さねばならぬとの思いが、そう言わしたのであろう。

そして、父と共に働き出したのだが、平太郎は、仕事は変えなかった。

やはり担ぎ呉服を引き続きやったのであった。

一からやり出す――。当然、そう思っていた勝だけに、父のこの行動は、些か不本意であつたが、

「違うことをやって、一からやり出して物にならんかったらそれこそ危険や。それよりも慣れた仕事の方が飯喰えるだけ安全や」

そう言われては、反対も出来ず、勝も手伝うことにしたのである。

だが、経験のある平太郎ですら余り売れぬ商品が、子供の勝に売れる筈はなかった。

しかも、相手は、女性である。

柄がどうのこうの、帯はやれ長襦袢は？ 八掛けは？

と聞かれても、満足に返事は出来なくなり、中には頭から

子供と見て話はわからぬと相手にもされず、勝は自然に、父と共に廻り、父の代りに呉服を担ぐ運搬係りで甘んじるしか仕方がなかった。

しかし、共に廻り、父のやり方を観察しながらも、父の売上げが上がらぬ原因は、早くも掴んでいた。

それは、少年時代に、京屋の番頭の黒田と話を聞いて聞いたそのものであった。

へ仕入れによる商品の選定

それが原因であつたのである。

勝は、黒田に葉書を出した。

京都へ来た時に逢つてほしい旨を伝えたのである。

黒田が快く返事をくれ、逢つたのは、八幡を去つてから十カ月振りのこと、つまり今から四年と二カ月前のことであつた。

勝は、京都の町を歩きながら黒田と話をした。

黒田は、勝が、父と共に呉服を売りに廻っていると聞いて驚いたようであつた。

「ほんでどや？ 売れるか？」

「あきません」

「そらそやろ。ぼんはまだ子供や」

「その子供の間に商品の勉強をしたいんです」

「商品の？」

勝は、父の売れぬ原因を打ち明けた。

「それで、大人になって客から相手にされるようになる迄に、商品を勉強してからやり出そうと思うんです」

「そうか、よっしゃ、わかった。且さんに話したろ。且さんにも、ちよいちよいばんのことは聞かれるのや」

そう言ええ、いつかこの黒田が、京屋の主人と逢わせると話をしていたことがあったのを思い出した。

その主人が、勝のことを憶えていてくれたと聞いて嬉しくない筈はなく、その足で京屋の店へ行った。

京屋の店は、室町にあった。室町は京都の間屋の町でもある。

間屋街と言っても、いかにも京都、京都した家並みの店が建ち並び、その一軒が、呉服間屋京屋の店であった。

だが、店へ一步入ると、かなり奥行のある店内には、呉服物が山と積まれ、勝はさすがだと驚いた。

「且さんに都合うかどうて来るさかいここで待つとり」

黒田が奥へ行っている間、勝は、店内を観察していた。

店の土間には、十人もの丁稚が働いていた。勝と同じ歳位であろうか、義務教育が高等科二年迄だから、勝より一つか二つ歳上かも知れない。勝の知っている限り、この京都でも丁稚は、殆ど霜ふりの詰襟姿であったが、ここではまだ着物に角帯、その上に前掛をしめていた。

「その帯自分で締めるの？」

勝は、たった一人上り櫃の上に坐って呉服物を仕分けし

ていたニキビ面の丁稚に聞いた。

「勿論どす」

勝を連れて来たのが黒田と知っていて、丁稚は丁寧な言葉で答えたが、わかり切ったことを聞くなど言いたげであった。

呉服物を売る者が、着物を着るのは当り前のことであったが、勝は、自分で角帯をひとりで締めるどころか、持っていないことにさえ気付いた。剣道を習う者が稽古着を着るように、こうして着物を着て毎日、これだけの商品に囲まれていたら、たとえ跡片付けや、掃除をしていても自然に商品を憶えられる筈である。それを考えると、やはり黒田と相談してよかったと、勝は思った。だが次の瞬間、勝の眼は、そのニキビ面の丁稚の手にとまっていた。

その丁稚が、客に見せた後らしい反物を少し払げては、器用な手つきで巻くのを見て、又聞きたくなったのである。

「君、何年ここで働いてるの？」

「半歳どす」

勝は半歳と聞いて驚いた。そういえば、その丁稚の京都弁は、どこかアクセントがおかしかった。どこか地方から出て来て、無理矢理京都弁を使わされているのであろうが、言葉がまだ慣れぬのに、反物の巻き方は身についているのに驚いたのである。

勝は、父と共に商売に出て十カ月になるが、まだこんな

器用に反物が巻けずにいるからである。

勝は、これだけでも丁稚との差が出来ていることを知ると焦せりめいたものを感じた。

「ね、君ら、その反物お客に売ることあるの？」

又、丁稚はそんな阿呆らしいことを聞くなど言いたげに、「売らるるのは手代はん以上で、わてらは、片付けだけです」

「そやろな。値段もまだわからんやろし」

「値段はわかつてる」

丁稚は馬鹿にされたと思つたらしく、思わず京都弁を忘れて反物を荒々しく投げるのを見て勝は、あつと驚いた。その反物は、父の平太郎が仕入れてくる反物の比ではなかったからである。

その反物は、勝が見ても上物とわかる反物であつた。

地色は濃い鶯色に、薄墨で描かれた木の葉が何とも言えぬ品と優雅さを見せていた。

「これ、高いのやろな」

勝が聞くと、

「そやなあ、この手のものとなると……」

丁稚は大人ぶって、ちらつと反物についている紙の付箋を見て、

「まあエイやな」

と答えた。

「エイ？」

「ああ、これは店の符牒ふだうでいくらかは教えられん」

丁稚は得意そうに言うのと、店の奥で話をしていた客が帰るのを見送りに立上つた。

勝は、丁稚が立つと、そこにある反物を次々に手にとつて見た。

そして舌を巻いた。その反物は、勝が見たことのないような物が揃つていたからである。そしてその付箋に、丁稚が言つたような符牒のエイとか、エビとか書かれていた。

「どや、気に入つたもんはあるかいな」

顔を上げると黒田が立つていた。

「こんなええもんもあるんやな」

勝は感心したように言うのと、

「それどこやない。店の中、品物の山や。他にもつとええのが何ぼでもある」

黒田は笑いながら、

「旦那、今ならええそうや。一緒にきい」

店の中を突きつて、更に奥にある部屋へ連れて行かれると、そこに六十過ぎのどっしりした体の男が、筆で帳面に何か書いていた。

これが、主人の京屋長之助なのであろう。

勝は、初めて見た京屋の店の品物に圧倒されて、改めて京屋がかなりの大問屋であることを認めると、体を堅くし

て、坐った。

「旦那。これが城はんとこのぼんです」

黒田が紹介してくれるのを見て、

「毎度、父がお世話になつております。城です。今後共よろしうに」

丁寧に挨拶すると、長之助は、初めて筆を置き、老眼鏡を上へ持ち上げてちらつと見たが、

「うちの品物売って廻つてるそうやけど、売れるか？」

長之助はいきなり聞いた。

「売れません」

「その品物どこで仕入れとる」

「はい。中野はんからです」

八幡から京都へ来てからは、父の平太郎は勿論黒田から仕入れてはいなかった。同じ京都だから京屋から直接かと思つたら、仕入れる品物は京屋の品物でも、京都にある中野商店という担ぎ呉服物専門の卸店からであつた。

「中野のどこから買つても、わてとこの品物やろ」

「はい」

「その売れん品物出してるわてのとこへ何を勉強に来たんや？」

この長之助の質問は皮肉であつた。

黒田から、まだ逢つたことがないのに、自分の名前を憶えていてくれていると聞いて、かなり好意的に迎えてくれ

ると思つていただけに、いきなりこう切り出されて戸惑つてしまつた勝である。

「いや、旦那、この子は売れん品物を仕入れる親父さんの目がないことに気がついてでせ、商品の勉強をしたいと……」

黒田もそんな主人にやや意外そうに思つてか、助け舟を出してくれた。

「黒田、売れん品物で何や。このわてとこは、他から仕入れた品物やない。堀川の染工場で作つて、正味わてとこの品物や。売れん品物はない筈や」

「そらそうどすけど……」

そこで漸く勝も口を開いた。

「わしも、売れんとは言つてませんし売れん品物ばかりやつたらこの店は潰れてると思います。けど、この店にも、むき、むきの品物があるんやないかと思ひますけど」

「むき、むき？」

「はい。田舎向けとか都会向けとか？」

「そら確かにある」

「親父は、その田舎向けの品物仕入れたらええとだけ思つてるようです」

「けど、田舎廻つてはつたらそんでええのと違うか？」

「それならもつと売れる筈です」

「そら何かが足らんのやろ」

「その足らん何かを勉強したいんです」

「その足らん何かとは……」

「はい、わしは小さい時、黒やんから聞いてましたし、今度親父と一緒に売りに廻って、いろいろなこと初めて知りました。たとえば、北陸の方の人は、色のごちゃごちゃした物が売れます。慣れんわしらが見ても、もうちよつとごちゃごちゃせん方がええのに思つてもそんなん買わはります。ところが、ある日、顧客先へ行つて、親父が他のことと話してゐる待つてゐる間にその家の庭見てたら、いろんな花のごちゃごちゃ植えたりします。花迄着物がらの柄と同じやと思つて、その花の手入れしてゐる下男の人に何でそんなにいろんな花植えるんかと聞いたら、雪のない畑や、せめていろんな色があつた方がええて言われて、着物もそれと一緒にやないかと気がついたんです。ここの人は、雪の白が見慣れてるさかいごちゃごちゃした色のもんが好きやないやろかと……」

長之助はじつと聞いていたが、もう帳面を見ていなかったのは興味を抱いたからであらう。

「ということは同じ日本でも雪が少いところの人は、白っぽいもんが好きな筈です。それやのに田舎田舎言つて何でも同じような物仕入れては、売れる筈がないと思ふんです」
長之助は、そこで初めて大きくゆっくりとうなずいた。
「成程なあ。確かに君の言うように、その土地土地の何か

が客の好みになつて現われてゐるのかも知れん。けどな、それを知る為には、商品の勉強よりも、客の好みの勉強をするのが手っ取り早いのと違うか？」

「客の好みを知つても品物のことがわからんでは何にもなりません。今も、店でいろんな反物見せてもろてましたけど、あんな品物があることも知りませんでした。いろんな品物のこと知つてたら仕入れの時にかいていろんなことがわかり、売りに廻る時には沢山の種類の品物を持つて廻れるやろと思ふんです」

「成程、君の言うことはようわかつた。そういうことなら勉強させたる」

「ほんまですか？　いつから来たらええんです？」

「いつからでもええ。その代り仕事はつらいで」

「覚悟してます」

「よっしゃ。黒田、堀川の工場へ連れて行つて野村にこの子を使うように言うとき」

「工場？」

勝は工場と聞いて驚いた。

「そや染工場で働くんや」

「染工場？」

「当り前や、商品のこと知る思ふたら、どうやって反物が出来るか知らんでどうする？　例えば、今言つてた北陸の話でもそうや。雪の多い地方はごちゃごちゃした色を好む

と言つたな。その色でもいろいろあるやろ。同じ赤でも何種類でもある。そしたらどの手の赤がええのか、これは、工場で染料扱つてたもんしかわからんやろ。それ知つてたら仕入れる時にも、この手の赤はないのかと注文つけられるし、もっと突つこんで、この手の赤と黄色でこういう柄行のもん染めてくれとも注文出来る。そうなたら強いやろ」

勝は、成程と思つた。

「そやから工場で働けと言うんや。どや」

「はい、働かせてもらいます」

「よっしゃ、但し言うとかくけど、わてとこが手が足らんで使うんやない。そっちから勉強するんやさかい給金は払わんぞ」

「はい」

「その代り、いく分でも手伝いになるんやさかいその手伝い位の分他で勉強させたる」

「他でて？」

「君、中学はどうした？」

「一年で退学しました」

「ほな二年から行かしたる」

「学校へですか？」

「ああ」

「学校は行きとうありません」

「行きとうないですむか。染料の名前ひとつでも横文字で書いたるんやぞ。これからの商人が横文字ひとつ読めんでどうするぞ！ これも商人の勉強の内や！」

学校へ行くのも商人になる勉強の内と聞かされては、勝はいやとは言えなかつた。

こうして勝は、染工場へ働きに、いや勉強に行くことになつたのである。

それを聞いた平太郎は、京屋の主人の言うことでもあり、反対はしなかつたが、

「お前が友禅屋でもつかいな」

と心配そうに言つたし、母のあやは、

「そうかて学校へ行かせてくれはる位なら、並の丁稚扱いはしはらしまへんやろ」

そう言いながら不安を隠し切れなかつたのは、友禅屋というのが、どんなものか、京では泣く子供に、

(友禅屋の丁稚にやつてしまふぞ！)

と言つたら泣きやむ位、その厳しさつらさは有名であつたのである。

その友禅屋、京屋の染工場は、やはり裏口を堀川に面していた。表には、普通のしもた屋を改造して硝子戸^{ガラスド}がはまつているというだけで決して大きくはなかつたが、京都独特の構造の奥、行きの深さは驚くべき程で裏庭にあたる部分には工場迄あつたのである。

従来京都の間屋は殆ど染工場など持って居ず、各自の専属のような染屋から品物を仕入れ、自分の工場を持つ京屋のような間屋は珍しかった。

とは言つて京屋も全部が全部、自分の工場で染めていたわけではない。勝には、自分の工場で染めた物だから売れぬ筈はないと言つたが、田舎向けの品物はやはり他の染屋から仕入れ、この京屋の工場では手描き友禪という高級な品物のみ作つていたのである。

手描き友禪というのは文字通り、柄を一々描いて染める手作りの友禪で、手間もかなりかかる。

その作業場は、二階にあつた。二階といつても、これ又京都の普通の家と同じ天井の低い暗い二階に、七、八人の職人が、体をくつつけるようにしてめいめいの机に向つていた。

その机は、小さい四角い板で作つた机で、すきやき台のように真ん中に穴が開き、その下に火鉢がおいてある。その前で、職人はちょうど物差しか、弓位の太さのしんし（伸子）を二本斜め十文字にして、その四隅の針にちりめんを張り、それをキャンバス代りにして、下絵から染料の着色した作業をやるのであつて、机の下に火鉢は、その着色した染料を乾かす為であつた。

殆どが住込みの職人で、仕事は朝の八時から深夜に至る事もしょっちゅうあり、陽の当たらぬ場所、背中を丸め

ての仕事では体によからう筈はなく、その上に、朝はたくわんのみ、昼は一汁、夜は、せいぜい魚の干物の食事では胸を思わぬ筈はなく、どの顔にも生氣はなかつた。

柄の着色が終ると今度は、染料を固定させる為に工場で蒸しにかけ、そして最後が水洗いである。

この水洗いが友禪屋の丁稚の主な仕事であつた。上物となると、工場の中に井戸がありそこで洗うが、堀川の上流で洗うこともある。

勝は、いきなりその水洗いの仕事からやらされた。殊に勝が京屋の染工場へ来たのが、一月末であつたから、ただでさえ底冷えのする京都のことである。川へ入つただけでも足が千切れるように冷たいのに、川の中で、反物を水の流れにまかせて洗うのである。

勝の手は、二日間で霜焼けで崩れてしまつた。

霜焼けは、寒いと痛みがくる。と言つて、少しでもあつためると痒みで耐まらない。

勝は、布団に入るのさえ苦痛な毎夜を繰り返しながら心の中で主人の長之助を、

（ようもあんな染工場で働かしよつて。何で間屋の丁稚に使ってくれん）

とののしつた。

しかし、自分から勉強さしてくれと頼んだのだし、文句は言えなかつた。それに、同じような目に会つてゐる染工

場の丁稚が五人も居たのである。

いずれも勝と同じ位の年頃だったが、彼らは住込みで、もつとつらい目に会っていた。粗食の上に、冬でもせんべい布団一枚で、休みは年に一回、愛宕神社の祭礼だけと決められていた。

そんな丁稚達を見ると通いの勝は、まだしもで、現にそんな丁稚から、

「あんたは得やな」

と白い眼半分で羨しがられていた位であった。

丁稚は住込と決められているが、勝のみ長之助も特例を認めてくれているらしかった。その大特例は、まだあって、約束通り西陣商業の転入学の試験を受けさせてくれたことであつた。

その入学が決つたのは、勝が、染工場へ来てから二カ月目の三月であつた。

その頃は漸く仕事にも慣れて来たし、春めいた氣候で苦痛も少かつたし、徐々ではあるが上物の友禪がどんなものかわかりかけていた。

そんな矢先、黒田が訪ねて来た。

「どや？ やれてるか？」

さも大変だろと言わぬばかりに、にやりと笑いながら聞く黒田に弱音も吐けず、

「やってますで」

と答えると、

「それで旦那さんも感心してはったで」

と告げた。

勝は、長之助との初対面の時と、この黒田から聞いた話とがかなり違っていたことを思い出していた。

「黒やんの旦那さんの話は、あてにならん」

「いや、嘘はつかん。此の間も、品物を売りに廻っていたような子が、染屋の水洗いの仕事でよう弱音吐かんとやってるて感心してはった」

「そうですか……」

勝の相槌には力がない。

「ほんまやで。いやわしも、旦那さんがぼんに染屋で勉強せいと云わはった時はびっくりしたで」

「そらそうですやろ。わしも問屋で働かせてもらえん思てましたさけ……」

「その問屋で働かしてもらお思たら誰でも働かせてもらえん。けど染屋へはちよつと来れん」

「そらこんな仕事誰でもいやがります」

「違ふのや。染屋になろ思ふもんは、染屋の丁稚になるけど問屋で商人になろ思て来た丁稚は、染屋には来られん言うのや」

「そら仕事が違うさかい……」

「いや、呉服問屋の商人になろ思たら染屋で働いて勉強す

るのが一番の近道なんや。しかもそれを出来るのは京屋だけや」

問屋は、問屋の店だけで染工場なんか持っている店は他にないことは、勝も知っていた。

問屋がそんな工場を持たなくとも、専属に近い染屋を何軒かを持っていた、そこから仕入れ、売るのである。

だが京屋は、自分の染工場を持っている。だから両方の勉強が出来る唯一の店と黒田が言う意味はわかった。

「そんなら、京屋の問屋の丁稚は染工場へ来させて勉強させはったらええのや」

「ところが、絶対そうはさせはらへん」

「辛い仕事で丁稚がやめて行くかも知れんさかいやろ？」

「いや、丁稚は辛抱強い。そんなことで顎は出さん」

「そんなら何ですか？」

黒田は、前後を見渡しながら低声で、

「丁稚の頃に、問屋と染屋の両方知ったらいかんことがあるさかいや」

黒田は謎めいたことを言ったのである。

「両方知ったらいかんて？　どんなことですか？」

「それは、わての口から言えんさかい自分で知り。ただ言えることはな、そのことは店の者でも、わてら含めて僅かしか知らんことやし、又わてらもかなり店で働いてから知ったことや。けどそれを知る機会を、且さんはぼんに与え

はったんや。それだけでも、且さんがぼんをどんだけ気に入って早うええ商人にしたらと思わはったかしれん証拠やええか、そう思わんといかん」

黒田の説明はそれで終り帰って行つた。

その後、勝はひとり堀川の流れを見ながら考えた。

京屋の主人が勝を目にかけてくれていると黒田が強調したその理由についてである。

黒田は、京屋の主人が、問屋で働く者では与えられぬ染屋で働く機会を勝にもたせてくれたとまるでそれが奇蹟のように話してくれたのである。

何故、問屋で働く者が染屋で働くことが出来ぬのか？

それについて黒田は、染屋のことを知ってはいけなから、京屋の主人が許可せぬとしか答えてくれなかつた。

（何を、どうして知ってはいけないのか？）

勝を考えさせたのは、その疑問であつた。

まず知ってはいけないというのは、問屋で働く者自身が為にならぬということなのだろうか？

勝が、まず、それを考えたのは、染屋の職人の遊び好きのことであつた。京屋の染工場では、全員が京屋の直轄下にあるからそうでもなかつたが、それでも上の方の連中は、寸暇を見つけて遊びに行つた。

それも、もっぱら女郎遊びであつた。

そして、その自分が遊んで来た様相を飯の時に明らかに

に話をした。その露骨で下卑た話は、勝も耳を覆いたくなくなるようなこともあった。

勝が、思い当たったのはそれで、問屋で働く者がそんな遊びの味を知ってはならぬとの理由で働かさぬのだろうかと考えたのである。

だが、そうでもないらしいかった。

何故ならば、勝が、早く一人前の商人になる為に染工場で働かしてくれたとも、呉服問屋の商人になる為には染屋で働くのが一番近道だとも黒田が言ったのを思い出したからである。

ということは、呉服屋で働く者は染屋の仕事に関する何かを知ってはいけないということらしい。

(そんなことがあるのやろか?)

勝はあの時見た京屋の丁稚と、今一緒に働いている染屋の丁稚を頭に描いてみた。

木綿物とは言え、清潔な着物に角帯をしめ、反物を器用に巻き、さも得意げに、符牒を言って柔らかな京言葉を意識的に使っている京屋の丁稚――。

いかにもあの色のある柄の反物を売るにふさわしい呉服問屋の商人になろうと、いや、ならせようと教育されている様子がありありとわかった。

だが、染工場の丁稚は、雲泥の違いであった。

染屋の丁稚は、暗いじめじめした丁稚部屋で、薄いせん

べい布団にくるまって震えて寝ている生活の毎日であった。霜焼けの崩れた手には洗っても落ちない染料がこびりつき、その染料で汚れた作業着一枚が唯一の着るもので、女郎買いの話題だけが共通の会話だという職人達の先輩に、所詮作法の教育を望むのも無理で、言葉遣いも荒く、方言丸出しであった。

それでなくとも、何かへまをやればそんな先輩の職人達から拳固が飛び、萎縮し切った眼はたえずおどおどして、それでいて、誰を信用することも出来ぬのか、猜疑心がありありとわかった。

いわば染屋の丁稚は地虫であった。

その地虫の丁稚に与えられる教育は、そんな過酷な毎日の中で染めの技術を誰から教わることなく、自分で習得して行くことであった。

そして、職人になれば、先輩達のやった通り下の丁稚をしごき、そして、女郎遊びをするのであろう。

そんな染屋で働く地虫の丁稚が自分達で知っていく染屋の何を、問屋の丁稚が知っては、主人が困るのであろうか?

勝には全くの謎であった。

だが、その何かは、かなり重要なことであるのは違いない。何故ならばあの黒田ですら最近になって初めて知ったという位である。恐らく京屋の主人も安心出来る人間にし

か教えない程の重要なことであるらしい。

（一体、そんな重要なことが、この染工場にあるんやろか？）

勝は、振り返りながら何の変わりばえのしない染工場を見た。

だが、さっき迄は、薄暗い、じめじめしたその工場が、勝の目にはまるで宝物の隠れている洞窟のような存在に見えて来たから不思議であった。

勝は、初めて興味を抱いたのである。

その重要な何かを探ぐりあてようと考えたのである。

黒田ですら、知る機会の持てなかったその何かをである。それを知ることが商人になるもつとも早い近道とすれば、尚更なほさらのことである。

折角、京屋の主人が、それを知る機会を与えてくれたのなら、知らねばならないと、勝は思ったのである。

染工場でややもすれば、背を向き勝ちであった勝が、やる気を出したのは、黒田がそのことを話してくれた翌日からであった。

勝は、水洗いの仕事も、苦痛を感じなくなったし、他の仕事も出来るだけ積極的に手伝おうとした。

まず染工場の仕事を知らねば、その重要なことがわからぬと判断したからである。

だが、その仕事の詳細を知るにはかなり部厚い壁があっ

たのである。

その壁は、同じ染工場で働く者の勝に対する特異な眼であった。